

ネルガルになった男

水玉金魚

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつて人間だった神が冥界に向かい、そこで孤独な女神と出会い恋に落ちる、これはそんな話。

目  
次

ネルガルになつた男  
冥界のメリークリスマス

10 1

## ネルガルになつた男

ある時、一人の神は思い出した。かつて己は人間だつたのだ、と。彼の名はネルガル。メソポタミア神話において太陽を司り戦神として崇められる神である。

彼にはずっと、それこそ生まれた時より神として扱われることに抵抗感があつた。人では決して成しえない神としての権能を持つことに違和感を覚えた。他の神々のように人を奴隸として扱うことに嫌悪感が芽生えた。

なぜ自分が、自分だけがそうなのかネルガルには全く心当たりがなく、長いこと彼を悩ませたが、思い出せばなんてことはない。

自分は神として生まれる前に人間として生きていて、これはその名残なのだ。

しかし、原因がわかつたところで何が変わると言うこともない。

そもそも思い出せたのは人間であつたという事実のみ。人間だった自分はどんな名前でどんな姿でどんな性格をしていてどんな人生を歩んだかについては全く思い出せなかつたのだ。

たつたこれだけで人間のように生きるには、ネルガルは神として長く存在しすぎていた。

つまりこれまでと同様、彼は戦の神として人間の戦いに目を向けるだけの日々を送つた。

だが、それまで人間という存在を種族や集団でしか認識しなかつたネルガルは一人一人に目を向けるようになつたのだ。

その多くが目を覆いたくなるような悲惨なものだつた。

自分が生きるために我が子を売る親がいた。生活のために親を殺す子がいた。欲に駆られ友を裏切つた者がいた。堕落に生きる為に善良な者を殺す者がいた。嫉みや逆恨みで人を貶める者がいた。

あまりにも弱く、醜く、愚かで救いようのない存在がそこにいた。けれども、それだけではない。

自分以外の誰かの為に立ち上がる者がいた。自分も空腹なのに食料を分け与える人がいた。自らの未来を勝ち取るために戦う人がい

た。助けを求める人に手をさしのべる人がいた。どんなに傷ついてもどんなに転んでもそれでも前に進もうとする人がいた。

人間の、そんなありふれた輝きをネルガルは初めて認識したのだ。気づけば彼は人間という存在が好きになっていた。

そうしてまた長い間人々を見守り続けたネルガルだったが、ふとあることを思つた。

人間が死後に向かう冥界というのはどんなところなのだろう、と。神々の中でも冥界について詳しい者はいない。

冥界への道のりは神でも厳しく、さらにそこはただ暗く、冷たく、退屈な場所だと言われておりわざわざ足を運ぶ者はいないのだ。

冥界を治める女主人が何かと問題を起こすイシュタルの姉であることも一因だろう。

彼女がなにかしたということはないが、だからといって進んで関わりたがる者はいない。

そんな冥界にネルガルは行つてみようと決意した。

例え冥界がどのような状況であつても、地上の神としてあれこれ口出しするつもりはないが、それでも人間たちが行き着く場所を一日でいいから見てみたかった。

思い立つたが吉日とネルガルはさつそく冥界に向かう。

その道なりは高い武力を有す彼にとつても過酷なものであつたが決して引き返しはしなかつた。

やがて見えてきた冥界は、話に違わず酷い世界である。

しかし、とても静かで秩序が保たれていた魂の眠りを守るにふさわしい場所に思えた。

しばらく冥界を眺めていたネルガルだが、そんな彼に近づく影が一つ。

「あなた、そんなところで何をしているの？」

その声に振り向けば、そこにいたのは一人の女神だつた。

恐らくは彼女こそこの冥界の女主人こと、エレシユキガルなのだろう。

ここで、本来ならネルガルは彼女に対し、挨拶をするべきだつた。

本人もそうしようと思つていた。しかしできなかつた。

彼はエレシュキガルに見惚れてしまつたのだ。

美の女神たるイシュタルの姉妹であるだけにエレシュキガルの姿も実に美しい。しかし彼はイシュタルとも知り合いで、とにかくはた迷惑な彼女と似てゐる顔など警戒をすることはあるても好感を持つことはないはずだ。

だが、それにもかかわらずネルガルはエレシュキガルから目を離せなかつた。

「……」は冥界です。いくら神といえど私の断りなく勝手に踏み荒らすことには許しません

「……」

「見た所、武器はないようですね。敵意を見せぬその姿勢は評価しますが、どのような理由があつてここに来たのですか？」

「……」

「先に言つておきますが、ここでは私の決めた法には誰であつても逆らうことはできません。おかしなことは考えないように」

「……」

「だから、その……えつと……」

「……」

沈黙を保つたままの何の反応も返さないネルガルにエレシュキガルはこの後どうするべきかわからず困惑した顔を見せる。

しばし沈黙が走り、ようやくネルガルが動き出した。

彼はエレシュキガルに近づくとその手を握り、こういつた。

「結婚してくれ」

「……は？」

突然告げられた言葉にエレシュキガルが呆然とする。そして、その顔は徐々に赤くなる。

それは決して、恥ずかしさや照れなどではなかつた。

「……何なの、私のことを、馬鹿にしに来たの？　いい度胸しているじゃない！」

その眼に憤怒を宿し、彼女は魔力を貯める。

「さつさと冥界から出ていきなさい!!」

ネルガルはふつ飛ばされ、あつという間に地上へ追い返された。

地上に戻されたネルガルは己の所業を反省した。

流石に名乗りもせぬまま突然プロポーズしたのはまずい。礼を欠く行為だ。

謝罪をしなければとネルガルはもう一度冥界に向かう。  
しかし足を一步でも踏み入れた途端、またしても彼は吹き飛ばされてしまう。

めげずにもう一度挑戦する。そしてまた吹き飛ばされる。

それを何回も何十回も繰り返し、百回を超える頃にはエレシユキガルのほうが音を上げ、彼はようやく彼女に謝罪し自分の名を名乗ることができた。

それからというものネルガルの日々は変わった。

足繁く冥界に通いエレシユキガルに会いに行き、地上であつた出来事を話したり、冥界に役立ちそうな物を見つけては持つていつたりした。

最初こそ彼を邪険にしていたエレシユキガルだが、地上の情報を得ようと思ったのか、それとも彼の持つてくる物は冥界にとつて利益になると思ったのか少しづつ彼の存在を許容するようになった。

そう、それはただの打算。あくまで冥界の為に、冥界を管理する者としての責任故に、エレシユキガルはネルガルを受け入れたのだ。

それはネルガルも気づいていた。だから彼女に結婚を迫ることはしなかつた。

きっとそうすれば冥界が良くなると判断すれば彼女は間違いなく婚姻を受け入れるだろうことをわかつていたから。

長い間、抑圧されて生きてきた彼女にこれ以上何かを強いるような真似はしたくなかったのだ。

なぜ己が彼女に惚れたのか、その理由は自分でもよくわからない。見た目だけならイシュタルにも似通っているが、自分は彼女にそういつた感情を抱いたことは一度もない。

にもかかわらず、どうしてひと目見た瞬間から惹かれてしまつてい

たのか。気高く聰明な光を目に宿しながら、張り詰めたような空気をまとつてゐるところに男としての庇護欲が芽生えたのだろうか。

しかしそれだけではない。彼女を知れば知るほどネルガルはますますエレシユキガルに惹かれていった。

彼女は冥界の管理者として、その役目に真剣に向き合つていた。生真面目で何事にも一生懸命で、冥界を少しでも良くしようと、ここに眠る魂たちが心地よく過ごせるようにと常に腐心している。

尊敬に足る女性ではあるが少しどジなところがあつて、そういうところが可愛くて、けれど生真面目すぎで自縛自縛に陥つてゐるのが心配で、ますます目が離せなくなつた。

そんな彼女の力になりたくて、ずっと一人でいた彼女を支えなくて、今日もまたネルガルは冥界に足を運ぶのだ。

「それじゃあ、俺はもう帰るな」

「ええ、さよなら」

もう何度目かになるかもわからぬ逢瀬。

いや、逢瀬なんて色っぽいものではない。ただ土産を渡して世間話をするだけなのだから。

話だつてネルガルが一方的に話して、たまにエレシユキガルが質問しそれに答えていくだけだ。

彼女の視線はすでに彼が持つてきた珍しい植物に注がれており、ネルガルのことなど一瞥もくれない。

しかし今日もエレシユキガルは美しいなどしか思えないのだから我ながら救いようがない。

帰ろうとするネルガルをエレシユキガルが引き止めたことは一度もなかつた。

そのことを寂しく思いながらも、変に未練たらしい姿を見せればそれこそみつともないと思い、表面上は何でも無い風を装う。

もはや何度も往復したかもわからぬ冥界と地上を結ぶ道は、今では鼻歌交じりで行き来できるまでになつた。やろうとは思わないが、多分目隠しても行けるぐらい熟知している。

そんな彼だから、遠くの気配を探れるぐらいに余裕があった。

だからエレシユキガルが自分の姿をじつと見つめていることにも気づいた。

その眼差しは強くともすれば熱がこもっているようにも感じる。だが戦の神たるネルガルは間違えない。その視線には確かに、殺気がこもっていた。

「……俺は何かやつてしまつたか？」

地上についたネルガルは首をかしげる。

最初の頃はまだしも、今は良好な関係を築けているはずだ。

しかしもしかしたら、知らぬ間に何か不躾なことをしてしまつたのかかもしれない。それとも頻繁に訪れすぎて迷惑だつたのだろうか。

「……少し、時間を置いて行くか」

そして今度はもつといろんなお土産を持つていつて、それで彼女が少しでも機嫌を直してくれるといい。

そう思つていた。

「私は、あなたが憎い……」

エレシユキガルは暗い眼差しでネルガルを見つめたまま静かにそういった。

普段の彼ならば彼女に近づきなにかあつたのかと問い合わせたのだが今はそれもできない。

いつもどおりに冥界に訪れた彼であるが、エレシユキガルが姿を表した途端に体に力が入らず、倒れ込んでしまつたのだ。

「エレシユ、キガル……」

言葉を発することすら困難となり、持つてきた多くの花や果実は地面に転がっている。

「他者と接する喜びも、誰かを待ち遠しいと思う気持ちも、もう会いに来てくれないんじやないかという恐怖や不安も……あなたさえいなければ、私は知らずにすんだのに……」

それはネルガルが想像もしていなかつたエレシユキガルの心情だつた。

てつきり彼女は自分にさほど興味が無いのだと思つていたのだ。

まさかそんなことを思つてくれていたなんて。そんなふうに思わせていたなんて。

「あなたが地上に戻る時、私がどれだけ行かないでと言いたかつたか、泣いて繩りたかつたことか……考えたこともないでしよう」

「……それは、すまなかつた」

「……ねえ、どうして冥界に来てしまつたの？ どうせただ的好奇心か物見遊山だつたのでしよう？ あんな冗談まで言つて……そのうち、飽きたらもうここに来ないつもりだつたんでしょう？」

「違う、あれは……」

言葉を続けようとしたネルガルだが、それを遮るようにエレシュキガルは手に持つていた槍をネルガルに向ける。

「許さない、許さないわ……私に恋というものを教えておきながら離れるだなんて……殺してあげるから死になさい！ 死んでよ！ 死ね！ そうすればお前の魂は永遠に私のものよ!!」

まるで殉ずるように冥界の女主人であることを崩さないエレシュキガルは、それが悪いことかのようになんか自分の個人としての気持ちを表に出さない。

この時、初めてネルガルはエレシュキガルの心に触れることができたのだ。

ならば、自分もそれに応えなくては。

「エレシュキガル……」

「黙つて、何も言わないで」

「好きだ、愛してる」

「つ！ またそんな、冗談を！」

「違う、本気だ」

心のどこかで関係が壊れることを恐れていた。下手に距離を詰めようとして彼女に嫌われるぐらいなら、ただの友人として共に過ごせるのならそれだけでいい、と。

だから彼女がここまで追い込まれてしまつたのは自分が原因だ。「じゃあ言わせてもらうけれど、私と結婚したらずつと冥界で暮らさ

なきやいけないのよ！」

「いいぞ」

「食べ物は粘土みたいな味がするし、娯楽もないし、私以外に話し相手すらないないのよ！」

「君がいれば他は何もいらぬ」

「ち、地上みたいに宴だつて開けないし、人間からの貢ぎ物もないし、ずっとずっと代わり映えのない日々が続いて、絶対……絶対に、後悔するわ」

「しないし、エレシユキガルにもさせない。約束する」

エレシユキガルは唇をかみ、顔をうつむける。

それを静かに見守つていると、彼女が顔をあげた。

その眼差しは先程までの陰鬱さがなくなっていたが、迷子の子供のように心もとない。

「……もし、その言葉が嘘だつたら、その時こそ本当に殺しちゃうわよ」

「ああ、いいぞ。君に殺されて、永遠に君のものになるのも悪くないしな」

体が動くようになつたネルガルが真っ先にしたことは、エレシユキガルを抱きしめることだった。

「その……今までごめんなさい。私、誰かとこんなにも接するのは初めてで……どうしたらいいのか、わからなくて」

「かまわない。好きな女の可愛い我が儘を受け止めるのも男の度量だ」

「あなたつて本当に、変な神ね……冥界に来たり、私と結婚しようつて言つたり……」

「そうか？」

「そうよ」

エレシユキガルの言葉に確かにそうかもしれないとネルガルは思考する。

思えば今まで、中途半端に残つた人間の残滓のせいか他の神々とも距離を置いていたし、友と呼べる存在もいなかつた。

けれど、そのおかげでエレシユキガルと出会えたのなら、彼女と共にいられるのなら、これ以上に幸せなことはない。

「……ねえ」

「ん？」

「本当にこれからはずっと私と一緒にいてくれるの？」

「ああ、約束する。何があつても君の傍にいよう。そして共にこの冥界を支えていこう」

ネルガルの言葉にエレシユキガルは微笑んだ。

本当に美しい、花のような笑みに、ネルガルは彼女こそが冥界を照らす太陽なのだと思った。

こうして、二人は夫婦となつたのだ。

ネルガルの権能により冥界の暗さと寒さは改善されたものの、まだまだ問題は山積みである。

冥界の主人の座を夫に渡した後もエレシユキガルは冥界のために力を尽くし、ネルガルもそんな妻を支え続け、二人は仲睦まじく暮らしたのだつた。

ちなみに、エレシユキガルの妹が冥界に来たり、その身代わりとしてその夫が来たりしてちよつとだけ冥界が騒がしくなつたり、些細なされ違いから夫婦喧嘩が勃発しその余波で天界と冥界の全面戦争に発展しかけたりしたが、それはまた別の話である。

## 冥界のメリーク里斯マス

「では、一度状況を整理しようマスター」

サンタになつたアルテラの言葉にリツカは神妙な面持ちで領いた。二人がいるのは冥界の底深く。

カルデアにいる人間やサーヴァントたちを突如として襲つた謎の病。それを解決するべく、二人はこの冥界に潜つたのだ。

ここではかつてバビロニアで戦つた仲間と再会することができ、それ自身はリツカにとつても嬉しいことだつたし励みにもなつた。

しかし、それだけではない。

「本当に、ケツアルコアトルをあんな目に遭わせたのはエレシュキガルなのかな……」

「本人もそう言つていたからな。まず、間違いはないだろう」

二人の脳裏に浮かぶのはここまでの中であつた一人の女神。ルチヤをこよなく愛する彼女が二人の前に現れた時、その姿はすでに満身創痍。本人曰く、エレシュキガルにやられたというのだ。エレシュキガルに負けたこと。それ自身はおかしくない。

この冥界においてエレシュキガルは法そのもの。どんな神でも太刀打ちできない。

しかし二人が気になつているのはそこではない。

「彼女の傷、あれは相手を倒すためでも殺すためでもない、いたぶるためだけにつけられたものだ」

確かにエレシュキガルは厳しい女神である。しかし、すでに勝敗が決した相手を執拗になぶるような性格ではなかつたはずだ。「それに、ケツアルコアトルのあの言葉も気になるし」

『ここにいるエレシュキガルをあの時のエレシュキガルと同じだと思つては駄目よ。けれど、彼女を拒絶しないで』

その言葉の真意を問う前に、彼女は現界を保てなくなり、姿を消した。

「彼女の言葉がどういった意味であれ、厄介なことが起きていることは確実だろう……そして間違いなくエレシュキガルと戦うことにな

る

「……うん。でも、俺達だつて引く訳にはいかない」

「ああ、その通りだ。行くぞ、マスター」

リツカの覚悟を確認し、二人は羊に乗つて進んでいく。

そして、彼女はいた。

「エレシュキガル……」

まだ遠目で後ろ姿ではあるが、バビロニアで力を貸してくれた彼女を見間違えるハズもなく、リツカはその名前を呟く。  
彼女もこちらに気づいたのか振り返る。

「――」

その瞬間、リツカは息をのんだ。

彼女の顔が、腐っていた。

いや、顔だけではない。よく見れば体のあちこちが変色し、崩れ、二目と見られぬ姿に変わり果てている。

「ああ、ようやくきたのね」

かろうじて口だとわかる場所から聞こえた声やはりエレシュキガルのものだ。

「エレシュキガル……なんだよね？」

「ええ、そうよ。私はエレシュキガルであり、エレシュキガルに切り捨てられた存在」

腐臭が鼻につき、胃からせり上がりつてくるものをリツカは耐える。  
それでも決してエレシュキガルから目をそらすことなく彼女の言葉に耳を傾けた。

「……切り捨てられた存在？」

「エレシュキガルはある特異点で誓約を破つた為に、消滅しかけた。  
それを免れる為に、あの特異点にいた自分を削ぎ落としたの。それ自体は間違つていなかつたわ。けれど、彼女は余計なことをした」

本来であれば記憶だけ処理すべきところを、エレシュキガルは別のものも一緒に切り落とした。

それがこの騒動の原因である。

「エレシユキガルは依り代の少女の影響で、己の『よくないもの』『恥ずかしいもの』を認識し、それを深層に押し込んだ。けれど、エレシユキガルはそれだけでは我慢できず、ついでとばかりに切り捨てたのよ」

「なるほど、そういうことか」

アルテラはケツアルコアトルの言葉の意味を理解した。

「つまり、お前はエレシユキガルそのものであるが、そのままの彼女というわけではなく、彼女的一部分を強調したものであるということだな」

「ええ、つまりはエレシユキガルが自分で醜い、汚い、いたらないと判断したもの凝縮した存在。『エレシユキガルの汚点』とでも名乗ろうかしら」

「それじゃあ、エレシユキガルは別にいるの？」

「ええ、いるわよ。どこにいるのかまでは言うつもりはないけれど」

エレシユキガル、否、『エレシユキガルの汚点』はリツカとアルテラに槍を向ける。

「エレシユキガルは私がそのまま消えるものと思つたようだつたわ。事実、そうなりかけた……けれど、彼女は自分の見苦しさを侮つていたのよ」

もしエレシユキガルが記憶のみ削ぎ落としていたらこうはならなかつただろう。『彼女』は肅々として消滅を受け入れたはずだ。

けれど、そとはならなかつた。

外界を知り、人間と語り合つた記憶を持ちながら、エレシユキガルの悪意や醜い部分を詰め込まれた『彼女』は、それを良しとしなかつた。

「羨ましいわ、妬ましいわ。自由を謳歌するあなたたちが、力強く生きるあなたたちが、美しいあなたたちが、私にないものをたくさんもつていてるあなたたちが。耐えきれないほどに！」

「……それがカルデアに病を流行らせた理由か」

「そうよ。それに不公平じやない。力を借りたあなたたちが無事で、力を貸した私だけが消えるなんて」

だから道連れにするの。

それを聞いてアルテラはリツカに耳打ちする。

「どうするマスター。説得できそうにないが」

「そんなの、決まつてるよ……」こにくるまでにしてきたことを、エレシユキガルにもするだけだ」

「確かに、サンタならやることは一つだな……では、行くぞ！」

二人は一気に『エレシユキガルの汚点』との距離を詰めた。

しかし、それを容易に許すわけもなく、『エレシユキガルの汚点』は二人に稻妻の攻撃を仕掛ける。

だが、アルテラはそれらを全て回避していく。

エレシユキガルは冥界では非常に強い力を持つ神だ。しかし、実戦経験においては戦士として生きたアルテラに敵うはずもない。

「小癪な！」

『エレシユキガルの汚点』はますます攻勢を強める。

そのあまりの勢いにアルテラは近づくことがままならなくなつてしまつた。

「ここまでか……だが、問題はない」

これ以上近づけば確実に攻撃が当たつてしまふ、その瀬戸際を見極め、アルテラは袋から何かの箱を取り出す。

「ふおつふおつふおつ……さあ、受け取るのじゃ」

そして一瞬の隙を突き、それを『エレシユキガルの汚点』に投げた。

「弁えなさい！」

当然、『エレシユキガルの汚点』は箱に攻撃を仕掛ける。

稻妻が直撃した箱はそのまま跡形もなく破壊される……はずだった。

「……え」

しかし、箱が破壊されることはなかつた。それどころか、無傷のまま。

予想外の出来事に『エレシユキガルの汚点』の思考が止まる。

そして自分に向かつてくる箱の蓋が開くのを呆然と見つめた。

エレシユキガルは冥界という場所に限り、ほぼ無敵と言つていい。

いかなる神も彼女には叶わず、勝てるとすれば、それは生きた相手のみ。

だが、唯一例外として、たつた一柱だけ、それが適応されない神がいる。

それは地上に生まれながら冥界を統べる王となつた者。エレシユキガルが背負う物を分け合い、エレシユキガルが大切にするものを共に守ろうとする奇特な存在。

「エレシユキガル！」

太陽がもたらす死や疫病を司る戦神であり、エレシユキガルの夫として冥界の王になつたネルガルだ。

「あ」

いま自分の目の前にいるのが誰なのか理解して、『エレシユキガルの汚点』は小さく震え、そして

「いやああああああああああああああああああああああああ!!」

絶望の声をあげた。

「いや、来ないで！ 見ないで！ 私を見ないでええええ！」

反射的に逃げようとするも、ネルガルが掴んで離さない。

冥界の女主人としての優位性がなくなれば、エレシユキガル自身の神格はそう高くはなく、ましてや相手は戦神だ。力ではどうあがいても勝てない。

「エレシユキガル、お願ひだ、待つてくれ。逃げないでくれ」

「いや、いや、いやあ」

彼の視線から逃れるように『エレシユキガルの汚点』は腕や手で自分の顔を覆つた。その隙間から溢れる声は泣きじやくる少女のように震えている。

「あの人気が、ネルガルさん？」

「ああ、エレシユキガルの夫と聞いているが……なるほど、冥界の王である彼ならエレシユキガルは敵わないな」

二人のやりとりをリツカとアルテラは少し離れた場所で見守る。

「でも……ちょっと、悪いことしちゃつたかな……」

「……まあ、これしか方法がなかつたのも事実だしな……」

『エレシユキガルの汚点』のあの反応。

恐らく、最愛の夫に自分の腐った顔を見られたくなかったのだろう。女心というやつだ。

罪悪感を刺激される二人に近づく人物……否、羊がいた。

「いやあ、ありがとうございます。おかげで助かりました」

「……ドゥムジカ」

アルテラをサンタに任命し、プレゼントを渡すように仕向けた仕掛け羊。

「エレシユキガルの権能を持つ『彼女』をどうにかできるのは同じ権能を持つネルガルだけなのですが、どうも『彼女』はネルガルの気配を察知すると逃げたり隠れたりでなかなか捕まえられなかつたんです」だからアルテラたちを使って無理やり引き合わせる必要があつたのだ。

もう一度、二人の方を向くと、『エレシユキガルの汚点』がネルガルの腕の中に大人しく収まっていた。

ネルガルは自分の手が汚れるのも構わず、『彼女』の顔をなでて、唇を落とす。

その仕草があまりにも優しくて愛しげなものだから、リツカは顔が熱くなるのを感じた。

「ほ、本当に一人は仲が良いんだね」

「そうだな……」

アルテラもその様子にどんな顔をすればいいのかわからないのか、気まずそうにしている。

「エレシユキガル、教えてほしい。エレシユキガルはどこだ？」

ネルガルの質問に『エレシユキガルの汚点』はしばらく沈黙を貫いたが、おもむろに一つの檻を指さす。

「あれか……」

ネルガルがその檻に向かつて何かを呟く。するとその檻はゆっくりと開き、中に収まっていた魂が外に出た。

その魂は大きくなり人の形となる。

「……ごめんなさい。私のせいで……迷惑をかけたわ」

バツの悪そうな顔で謝罪するのは切り離されも偏つてもいない本来のエレシユキガルであった。

「エレシユキガル……」

リツカはその名を呼びかけるも彼女は複雑な表情を浮かべるだけである。

「その……私にはあなたたちが誰なのかわからないの。そのことについても謝罪するわ」

「ううん。大丈夫だよ」

ドウムジがエレシユキガルに近づくと彼女はそちらに体を向ける。「ドウムジにも世話をかけたわね」

「いいえ、お気になさらず……こういうところを見てもあなたといシユタルの姉妹なんだなって確信するぐらいですかから」

「うつ……わ、私だって醜い所を無くせば美しくなるだなんて、自分でも浅はかだったって反省してるから……でもあの女のことは言わないでちようだい……」

よほどその言葉が嫌だったのだろう、苦虫を噛み潰したような顔をするエレシユキガルにドウムジは白々しく、「それは失礼」と言つた。エレシユキガルもそのことは構わず、独り言のように「それにしても」と呟いてネルガルの方に目を向ける。

ネルガルはエレシユキガルのことを気にしているようだが、自分を抱きしめる『エレシユキガルの汚点』を引き剥がすことができず、少し困ったような顔でそれでも嬉しそうにエレシユキガルを見つめていた。

「…………」

エレシユキガルは無言のまま二人に近づく。不穏な気配を察し、リツカとアルテラとドウムジは距離をとつた。

「ちょっと！ 今までネルガルにくつづいてつもりなのだわ！ さつさと離れて！ 私が抱きしめてもらえないじゃない！」

「嫌よ！ 私だってエレシユキガルなんだから、ネルガルと一緒にいる権利はあるのだわ！」

「何言つてるのよ、あなたさつきキスまでしてもらつてたじやない！」

私に代わりなさい!!」

「まだまだあれぐらいじや足りないのだわ！ もつともつとキスして欲しい!!」

「そ、そんなの私だつてー!!」

互いに相手をネルガルから遠ざけようとするも力が拮抗していくうまくいかない。

ネルガルの方は二人共エレシユキガルなのでどちらの味方をするわけにもいかず、両方の腰に手を回していた。相手が同一人物でなければただの優柔不斷なクズ男である。

「お願ひだからつ……一緒にいさせて」

段々と口論は白熱し、やがてたまりかねたように『エレシユキガルの汚点』は絞り出すような声を出す。表情は判別できないが、心なしに苦しげに見える。

「私はつ……私はもうすぐ消えちゃうんだから、これぐらいじやない……！」

「つ！」

その言葉にエレシユキガルは何も言えなくなる。リツカとアルテラも胸に苦いものが広がる。

そう、『エレシユキガルの汚点』はもうすぐ消える定めなのだ。

あれほど焦がれた地上の記憶を持ちながら、あれほど人の輝きを目に焼き付けながら、あれほど美しいものを知りながら、消えなければならぬ。

だつたらせめて愛しい人の腕の中で逝かせてくれと、そう『彼女』は厚かましくも切実に懇願しているのだ。

しかし、待つたをかける人物がいた。

「待つてくれ。まだ手はある」

「ネルガル……」

「エレシユキガルが初めて地上に出て、他の人間と交流した記憶だ。それを失つてほしくない」

『エレシユキガルの汚点』が持っているものは、ネルガルがどんなに与えたくとも与えられなかつたものだ。

そして何より……

「例え一部でも、エレシユキガルが死ぬなんて耐えられない」

「……でも、どうやつて？」

「大丈夫。おい、ドゥムジ」

「はいはい、わかっていますよ」

ドゥムジが『エレシユキガルの汚点』に近づくと、『彼女』の体が光を帯びる。

それがなくなると『エレシユキガルの汚点』は閉じていたまぶたを恐る恐る開けた。

まず感じたのは体の違和感。あれほど蝕んでいた痛みや鼻につくような腐臭がなくなっていたのだ。

そして己の体を見て、その後自分の顔をペタペタと触る。ようやく自分の身に起きたことを認識して、震える声で言つた。

「わ、私の、体が、もとに戻つてる!?」

「私の力で補強しました。これで取り込んでも消滅することはないでしよう」

「……どうして、ここまでしてくれるの？」

問い合わせるエレシユキガルにドゥムジは当たり前のよう答える。「それはもちろん、あなたには借りがあるからです。さ、さつきと一つに戻つてください」

促されながらも一人のエレシユキガルは困惑の表情を浮かべたまま動かない。

「どうしたんだ？」

「……ねえ、ネルガル」

「ん？」

「私に醜いところがあつても、よくないものを抱えたままで、それでも愛してくれる？」

「何を言つているんだ、当たり前だろう。俺はそのままのエレシユキガルが好きなのだから」

「うん……」

ネルガルの言葉を聞いて、二人は躊躇いがちにだが互いに手を伸ば

し、触れる。

そして『エレシュキガルの汚点』はもう一人のエレシュキガルに溶けていった。

「ああ、そうだ、そうだわ……思い出した」

一つになつたエレシュキガルの目じりに涙が浮かぶ。

「ネルガル、私……」

「ああ、行つておいで」

夫の言葉を受け、妻は初めて出来た友人に駆け寄つた。

この時、彼女たちは本当の意味で再会を果たしたのだ。

「いいんですか、ついていかなくて」

その様子を遠くから見つめるネルガルにドゥムジがそう声を掛け

る。

「そんなことするほど無粋ではないさ」

「いや、意外ですね。あなたは存外独占欲が強いところがありますから、彼女が他の者と親しくするのを嫌がるかと思いました」

「……何を根拠にそんなことを」

「だつて、私が彼女と一緒にいると怖い顔して近づいてくるじゃありませんか」

「当たり前だろう。誰が好き好んでお前のように軽薄な奴を妻に近づけさせるか……それに」

ネルガルはリツカに視線を送る。

「あの人間は……俺がエレシュキガルに与えられなかつたものを与えてくれたからな」

ネルガルは自分のできる限りでエレシュキガルを幸せにしてきたつもりだ。けれど、ついぞ自由だけは、どうしても与えることはできなかつた。

「エレシュキガルがようやく外の世界と接することができるようになつたんだ。俺はそれを祝福するだけだ」

「そうですか。しかしあの様子ですると、もしかしたらカルデアに喚ばれるかもしませんよ」

「……だから何だ？」

なんとなく嫌な予感がしてネルガルはドゥムジを睨んだ。

しかしドゥムジはそれに怯むことなく「いえ、大したことはないんですが」と付け足してこう返した。

「もしかしたら、そこで恋の一つや二つ芽生えるんじゃないかと」「…………ほう？」

ネルガルの纏う雰囲気が剣呑なものになっていく。だが、ドゥムジだつてそれで慌てふためくのなら最初からこんなことは言わない。「貴様……ずいぶんとふざけたことを言う」

「いえいえ、あながち筋違いではありませんよ。あのカルデアには名だたる英雄が揃っているのですから、彼らに口説かれればエレシュキガルだつてくらつとしてしまうかも」

「馬鹿なことを言うな。エレシュキガルはそんな尻の軽い女ではない」

「しかしあそこにいるサーヴァントの中には生前の妻や夫を愛しながら、新しい恋を謳歌する者もいるそうです。彼女も同じ考えを持たないとも限らないのです?」

「…………」

ネルガルの表情が苦々しいものになっていく。

「確かに……エレシュキガルは魅力的だ。美しく可憐で清らかで心優しく眞面目でひたむきで健気で愛らしい。お前の言う通り、周囲の男たちがこぞつて求愛してしまうのは自明の理」

「いえ、別にそこまでは言つてません」

「だが……エレシュキガルの夫は、俺だ」

低く呟くようなその声はやけにはつきりとドゥムジの耳に聞こえた。

相変わらずエレシュキガルに関することには心の狭い神だなあ、と思いつながら「まあ、頑張つてください」と返す。

仮にも自分の言葉が発端となつたというのに、随分と他人事である。

しかし、これがドゥムジなのでネルガルも気にしなかつた。

アルテラと共にカルデアに帰つていくリツカ。

エレシユキガルはその姿が見えなくなるまで見送り、見えなくなつてからもその場から動かなかつた。

その顔には一抹の寂しさが滲んでいる。

「エレシユキガル」

そんな彼女を気遣うようにネルガルがその肩を抱く。

「寂しいか？」

「少しだけ。でも、悲しくはないの。これが最後ではないから」

そういつてエレシユキガルは微笑む。

自分以外の誰かに向けられたその笑顔にネルガルは憐氣を覚え、そんな自分に自嘲する。

(これでは、ドゥムジのことを責められないな)

生まれてからさんざん抑圧されてきたエレシユキガル。そんな彼女に自分は決して何かを背負わせたり押し付けたりはしない。

そう誓つたはずだ。

「ねえ、ネルガル」

しかしそんな彼の思考など知らぬエレシユキガルは彼の腕にそつと手を回す。

「もし、もし一緒にカルデアに喚ばれたら、私ね、あなたといろんなどがしたいの」

「……俺と？」

「ええ、そうよ。ほら、私達つてずっと冥界にいたでしよう？　だから、その……デートがしてみたくて……駄目かしら？」

不安げな眼差しに考えるよりも先に口が動いた。

「まさか、全然。全く駄目じやない」

「本当!？」

こんなにも自分を愛してくれる彼女に比べ、己はなんと小さい男なのかとネルガルは自分が情けなくなつた。

時々自分は本当に彼女に相応しい男なのだろうかと不安になることもあるが、仮に自分が彼女には相応しくない存在だと言われようとも、もつと彼女に似合う偉大な神が現れようとも夫の座を明け渡す気

は微塵もない。

だからもつともつと男を磨かなければと決意する。

「きっと、エレシユキガルと一緒にならどんな景色も美しく、どんな食事

だって美味しく感じるだろうな」

「私もよ、ネルガル。それに私 地上には慣れてないからいろいろ教えてほしいのだわ」

「ああ、勿論だ。エレシユキガル……」

「ネルガル……」

いつの間にか抱きしめ合う形になっていた二人は口づけを交わす。

そしてこれらを目の前でまざまざと見せつけられたドゥムジは小

さく舌打ちをして「爆発しろ」と呟いた。